
異世界ハーレム彼女の逆襲！

キタキツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界ハーレム彼女の逆襲！

【NZコード】

N3797Z

【作者名】

キタキツネ

【あらすじ】

あまりにも凶悪なその目つきのせいで女性に嫌われる主人公、春樹。

そんな彼が召喚された異世界を救い、その報酬として神に要求したものが

「自分を嫌い、避ける全ての女性が自分を好きになる」といつ『ハーレム機能』であった。

現実世界に帰った主人公は、その凄まじいまでの性能を誇る

『ハーレム機能』のおかげで、我が世の春を謳歌するのだが……。

山田春樹のハーレム事情

「人を外見で判断してはいけません」

小学校の頃、誰もが一度は先生に言われた言葉だろう。あの頃、純粋無垢だった俺はこの言葉を信じ、そして裏切られた。

こうして朝の身だしなみを整えるため、鏡の前に立つたびに抉り出される俺のトラウマ。

数少ない（というかほとんど唯一と言つてよい）友人であり幼馴染でもある、美鈴が俺に向けて言つた我が人生最悪の褒め言葉。

『晴樹つてさー、『容疑者A』の写真が一番かっこよく写るよねー!』

……きっと美鈴本人は、必死に俺のいいところを探そうとしていたんだろう。そうに違いない。そう信じたい。生まれつき目つきの悪い俺は、何も知らずに見れば人の一人や二人簡単に殺してそうだ。その怖さは毎朝鏡を見るたびに俺が俺にビビるくらいすごい。

身長体重、共に標準。運動神経だつて頭の出来だつて顔だつて決して悪くない。そんな俺に彼女どころか友人一人出来ないのは、ひとえにこのハンパなく悪い目つきと、それにより幼少時から虐げられてきたせいですっかり歪んでしまった性格のせいなのだ。

あえて断言しよう。

人とは、外見が全てなのである。

だがしかし。二日前から俺の世界は変わった。

ぼっちだった三日前までの俺よ。さようなら！ 俺は、俺だけは

あんたのこと、嫌いじゃなかつたぜ！

こんなにまけたリア充な俺。これから張り付くだけよろしくなー。

「さて、今日も俺のハーレムな一日が始まるぜー。」

……異世界、というのを知っているだろうか？

パラレルワールド、平行世界。呼び方は様々だが要はこの世とは違う世界の事である。

そんな世界に俺が呼び出されたのは三日前の昼休み。近づいてくるクリスマスの話題をする隣の席の女子たちに気を利かせ、トイレの個室に立てこもった時のことである。別にこの子たちを避けたわけじゃない。プライベートな予定に聞き耳立てるのはマナー違反だという紳士な俺の判断からである。…………『やつぱり雪が降るイヴに真剣な眼差しで見つめられたら覚悟しちゃうよね！』といつ声に俺のトラウマが刺激されたからでは断じてない。…………けつ。俺に真剣な眼差しで見つめられたら命と直操を失う覚悟をするくせによ。

いやまあ、俺の事はどうでもいい。

本題は、余鈴を聞きトイレのドアを開けたらそこが異世界だったといふことだ。

思わず呆然とする俺に、その世界の神を自認するおつわとなは言った。

「異世界の子よ。貴様に力を『えよう。』この世界を救つてくれ」

正直、「やつた！」と思つたね。

この世の全ての女性から（大多数の男性からも、なのだが、この際男なんてどうでもいい）嫌われていた俺にはこの世界に絶望しかなかつたからだ。このまま、あと十五年ほど経過したら危うく剣も魔法もない魔物もいないこの現実世界で立派な魔法使いになつてしまつところだつた。

RPGとSLGと凜子攻略はぼつちの嗜み。俺は、過去にやりこんだゲームの知識から思いつく限りのありとあらゆるチート性能を自称神に要求し、その全てを身に付けた。

もちろん、一番大事な『ハーレム機能』もばつちりだ。

じつして万全の準備を整え、お姫様や女戦士や無口ながらも俺に好意を寄せる女魔法使いや女性神官や幼女に化ける俺にだけ懐く魔物などを従えた俺は。

なんと一日で魔王軍を壊滅させてしまつたのである。しかも自分の力に依らずに。

最大の功績者は人ではなく、もちろん魔物でもなく、現実世界で流行つていた『風邪』であった。この世界の魔物たちは、偶然風邪気味だった俺のもたらしたウイルスにひとたまりもなく敗れ、次々と勝手に倒れていつたのである。

余りの事に呆然とする俺を尻目に、僅かな側近に守られた手負いの魔王を追う王国軍。

やがてその首が獲られ、この世界に平和が戻った時、俺は滂沱の涙を流した。

「一日！ たつたの一日である。

これでは、シンデレラ姫様が俺にデレる時間も、普段は勝ち気な女戦士がベッドでは人が変わったように甘えん坊になる時間も、我が家を犠牲にして無口な魔法使いを守り抜いた俺に彼女がそつと寄り添つてくる時間も、貞淑な女神官がその経典に逆らい教会で俺に貞操を捧げる時間も、ネコ耳尻尾付きの魔物つ娘（娘と書いて『こ』と読む）とちよつとHなキャツキヤウフフをする時間も、全くなかつたのだ！

言葉もなく涙する俺を見て、なにを勘違いしたのか神は言った。

「この世界の平和の為に泣いてくれるとよ……。よし。本来ならば在り得ぬことだが特例として認めよう。元の世界に戻す際、ひとつだけそなたに与えた能力を持つたまま帰ることを許そ。……勇者よ。何を求める？」

そんなの決まっている。

「ハーレム機能を！ 世界中の、俺の事を嫌い、そして避ける全ての女性が、俺のこと好きで好きでたまらなくなるよにしてくれ！」

……ハーレムの王、山田晴樹の朝は早い。

「やつぱり朝のこのひと時は大事ですね。これから出会つ様々な女性とのスムーズな会話のためにもTV、新聞、ネットでの情報収集は欠かせませんよ」

思わずナレーション風に言つてしまつたが、より良いハーレム生活の為には努力も必要なのだ。……嘘です。本当はもっと深刻な理由があります。

さて。今日も一日がんばるか。

母親の作ってくれた朝食を平らげ、俺はマンションのドアを開ける。

どん。

「きやつ」

外に出た俺に、『食パンを咥え走つてきたかわいい女の子（笑）』
がぶつかつてくる。

「おつと失礼。お怪我はありませんか？」 さあ、手をどうぞ

「は、はい……ぱつ」

顔を赤く染めつつ、そつと手を差し出すその女の子。二日前の俺
がやれば、手ではなく財布が、「こ、これで許してください……」
とこう言葉と共に差し出されるといふだ。

名残惜しげなその子と別れ、エレベーターに乗り込む俺。同乗するのは〇〇風お姉さん。

ガタン。

「きやつ」

「おや? 停電のようですね。エレベーターが止まっています

「そ、そんな……暗くて、怖い……」

「だいじょうぶ。俺がついてます。さあ、手を握つてあげまじょう

「あ、ありがと……。大きくて、安心する手……ほつ」

もう放さないとばかりに力強く握りしめられる手。三田前の俺がやれば、エレベーターの管理会社の前に警察に連絡されるところだ。

名残惜しげなそのお姉さんと別れ、学校へ向け歩き出す俺。田の前を歩くのはなぜかふらふらしている清楚な女子。

ふりつ。

「きやつ」

「危ない!」

「あ、すいません……。ちょっと貧血気味で……」

「俺が支えなければ車道に出てしまうところでしたよ。思わず抱きしめてしまいましたが、苦しくはありませんか?」

「あ、ありがとう、ござります、平氣です……。男性に抱きかかえられるのは、生まれて初めてです……ほつ」

なぜか俺の胸にのの字を書き始める女子。三田前の俺がやれば、そのか細い指ではなくスタンガンとかそういう防犯アイテムが胸に突きつけられるところだ。

名残惜しげなその清楚な女子と別れ、また歩き出す俺。やがて見えてきたのは……

「なんだ。美鈴か」

「朝っぱらからなんだとは失礼ね……。はい。昨日の分」

怒りつつ、大きな紙袋を差し出す我が幼馴染、椎葉美鈴。つすい茶色の髪を活動的なショートカットにした、やや釣り目がちの大きな瞳が印象的なこの女とは、幼い頃、何とお医者さん「ひこ」をしたほどの仲。……例えそれが「俺患者さん。美鈴歯医者さん」という変則的お医者さん「ひこ」だったとしても、だ。……ぐらついていた乳歯を「ひこ」に引き抜かれた時の恐怖と痛みは一生モノのトラウマその二だ。

「内訳説明するよ。ラブレター十一通。手作りのお菓子が四つ。同じく手作りのお弁当が二つ。味はひとつはまあまあ。もうひとつは火加減が甘い。あとついでに私宛の『晴樹様に近づくな』という趣旨の脅迫文が一通。殺害予告が二通。」の四つは「のまま警察に持つていいね」

……脅迫文より殺害予告のほうが多い」と、女子の想いの闇の深さを感じる。

いやそんなことより。

「なんで勝手に食つてるんだよ弁当。それ俺宛のだろ?」

「だつて二つも食べられないでしょ? だから適当に私が減らしておいてあげたの。……だいたいさ、最近の晴樹はおかしい。処構わず誰かれ構わずフラグたてまくるの、いい加減にやめなさい。一緒にいる私に迷惑がかかるから」

「そう思つからこそ、こんな早い、あんまり人がいない時間に登校してるんじゃないか」

「それでこれなの? ちょっとあんたおかしいんじゃない? 主に

田つ毛と性格が

「田は関係ないだろ? 田は。泣くぞ?」

「性格のまつは否定しないんだ……」

……そうなのだ。神の力はやはり偉大で、今の俺は歩くフラグ製造機。登校するだけでこの始末だ。……ちなみにこいつ、幼馴染の美鈴にはチート能力が適用されない。俺の願いが『俺を嫌い、そして避ける全ての女性が』であつたためと思われる。なんだかんだいつて『トイツ、美鈴は俺を嫌つてはいないようだ。好意があるかどうかはともかく。あと田の事は言つた。悲しくなるから。

「……だいたい、なんでみんな私をメッセンジャーにするのよ。こんななのどにがいいのか知らないけど、気持ち伝えるなら直接言えばいいのに」「元の

「誰もがお前みたいな鉄の心を持つていると限らないだろ?」

…『ああ、愛しの晴樹様に気持ちを伝えたい。でも振られたらどうしよう?』ってなるのが乙女心といつものなんじやないか?』

「最近の調査によるとそういう『乙女』は一十年ほど前に絶滅したらしいわよ」

まじかよけやんと保護しようと国一 イリオモテヤマネコより貴重だらうが乙女!

「それに俺だつて別に処構わづフラグ立てるわけじゃねーよ。…つと、お嬢さん、なんで泣いているんだい? ああ風船が木に引っ掛けてしまったんだね。……ほらこれた。もうなくしちゃだめだよ」

「ありがとうおこにちちゃん! みずき、おおきくなつたらおこにちやんのおよめせんになつてあげるね!」

「……そうね」

「俺だつて最初の彼女は理想通りの人を選びたいからな。誰かれ構わざなんてとんでもない。……もしもしそこのお婆ちゃん。そんな大荷物持つたまま歩道を渡るのは危ないですよ。持ちましょ。……へえ、曾孫さんの顔を見に？ お婆ちゃんに似てきつと可愛らしいお嬢さんなんでしょうな」

「ありがとうよ、若いの……。あたしがあと七十歳若ければのう……」

「……理想が高っことはこことだわ」

「だろ？」

「もういいわ。なんだか疲れた……。早く学校行こ。……あ、小鳥ちゃんおはよー」

嫌みのように俺に向かい溜息をついた後、別人のように爽やかな笑顔で挨拶をする美鈴。おい。たまにでいいから俺にもその笑顔を向けるよ。減るもんじゃねーだろ。

「あ、あ、おはようございます。美鈴さんと……山田くん」

小さな声で挨拶を返してくる小柄な少女。前髪を切り揃えたセミロング？ とでも言えばいいのだろうか？ その表情は田を覗すように伸びられた髪のせいでよく見えない。

「おはよー小鳥ちゃん。いつも早いねえ」

「そ、そんなことない、です。……あ、先、行きますね」

ペーッ。そんな感じで軽く会釈すると、小走りで行つてしまつ彼女。

女。

「……小動物みたいな子だな。知りあい？」

「ええ。私のクラスメイト」

僕と美鈴は腐れ縁とも言つべきか同じクラスになることが多い。ちなみに今年も例年通り同じクラス、姫神学園高等部1年C組だつたりする。

「……いやまあ、ほら。俺、クラスの女子とあんまり口きかないし……」

「……昨日の調理実習での課題のクッキーを、クラスのほぼ全ての女子から貰つた人の発言とは思えないのだけど?」

「お前くれなかつただろ」

「だから『ほほ』つて言った」

「じゃあ、きっとあの子もくれなかつたんだよ」

「最後尾に並んでたわよ。小鳥ちゃん。……ちょっと大人しいけど、いい子だよ。小鳥遊小鳥ちゃん」

「いい子かどうかはこの際おいておくとして、その名前の付け方はどうかと思う。親の顔が見たいってこういう時に使う言葉なのか?」

字面を見れば韻を踏んでると言えないこともないが、手抜きにも程があると思うぞ小鳥遊両親。俺が市役所の戸籍係だつたら赤ペンで添削して突つ返すところだ。

「ま、名前は本人の責任じゃないからね。……晴樹。長い付き合いに免じて警告しておくけど、ああいう大人しい子ほど思い詰めたらすんごいんだからね。下手に手出しさしないほうがいいわよ」

「了解。……とりあえず早く教室行こうぜ。これ以上フラグ立てたら身が持たないからな」

「……この時、俺はもう少し考えてみるべきだったのだ。

小鳥遊 小鳥。たかなし ことり。

この大人しそうな子が、三日前に変わった俺の人生を、もう一度
変えることになる。

山田春樹のハーレム事情（後書き）

はじめまして。キタキツネと申します。

普段、割とよく人が死ぬようなものばかりを書いているので
たまにお気楽に、ゆるいものを、と思い勢いで書いてみました。

ご意見、感想などが頂けたらうれしいです。

「……やれやれ。すっかり遅くなつちました」放課後。田直の仕事で遅くなつた俺は、人気のない廊下を教室を目指して急ぐ。

『晴樹君との田直』は今のクラスの女子にとつては一種のステータスになるくらいの幸運らしく、黒板を消そうとして手が触れ合づ、ゴミ出しに行つて折からの突風でスカートがギリギリまでまくれ上がり、「……みた？」と上田づかいで言われる。黒だつた。気合入りすぎだらう。山口さんなどなど、フラグのオンパレードを積み重ね、ようやく担任の待つ職員室に田誌を提出するところまで行つたのだ。が。

そこで我らが担任、菊池先生（二十七歳。独身。大人の色気むんむん）と山口さんとの間で女の戦いが勃発。「田誌の内容に關して山田君に確認することがあるわ。個人的に」と俺だけを引きとめようとする菊池先生と、「いっしょにお家に帰るまでが田直です！」とこう遠足と混同しているらしい山口さんによる舌戦はお互い一步も引かず、どういう流れでか「では実技によつて決着をつけましょう」という先生の挑発に「先生が失つた若さと言うものを見せ付けてあげます！」と山口さんが言い返しつつスカートのホックに手をかけたあたりで男性教師による物言いが入り、ようやく俺は解放された。

ありがとう日本史の田中先生。あんたの授業、脱線した雑談と豆知識が多いけど俺は嫌いじゃないよ。もしタイムトラベルとかして過去に行つたら役に立つかもしれないし。

菊池先生と山口さんによる「実技対決」を見てみたい気持ちもちらんあつたが、それよりも俺にとつては夕方六時から再放送されているアニメのほうが重要だった。……『チート機能』によりリアルでの女性との関係は大幅に改善されたとはいえ、一次元の女の子を愛する気持ちも失わない俺である。今日は青と赤の名シーンだ。見逃せないぜ。

逸る気持ちをそのままに、恐らく無人であろうと予想した教室のドアを勢いよく開ける俺。意外なことにその日に映つたのは、窓から差し込む西日に佇む一人の地味な女子生徒。

「あつ……」

小鳥遊さんだった。

「おひ。小鳥遊さんか。もう遅いぞ？ ビーッした？」
「あ、あの……山田くんを、待つてました……」

「おひ。素晴らしい『チート機能』。この地味めな彼女にもしつかりその力は働いていたと見える。だがしかし。

「本当にすまん。小鳥遊さん。今日は俺、どうしても外せない用事があつて……」
ひとりぼっちは、さびしいからな。俺が見てやらなきゃいけないんだよ。テレビ。

「あ、あの、わ、私、山田くんが、山田くんのことが前から……」
「あれ？ 聞いてた俺の話？ 俺、今から大事な用事が」
彼女の様子を窺う。……あ、だめだこれ。ものすごくテンパつて

る。震えるその小さな手はスカートの端をぎゅっと握りしめ、俯いたその顔は過度の緊張に赤くこわばり、多分、俺の声なんて一切届いていない。参ったなあ。

確かにアニメは予約録画している。でもな、リアルタイムで見ながら実況板に書き込むあの一体感がいいんだよ。俺たちぼっちが多くの同志たちと気持ちを一体にして感動を分かち合つことが出来る唯一の時間。それは何より貴重なもので、本物のBBS戦士と自負する俺としてはやはりここは話を切り上げて。

「め、迷惑かとは思つたけど……でも、言わないで後悔するよりはいいかなって！」

そう言つて自分を奮い立たせるように勢いよく顔を上げた小鳥遊さん。その拍子にトレードマークのように目にかかるついた長い前髪がさらりと顔の横に流れ、その潤んだ大きな瞳が見える。……あれ？ 意外なほど整つた顔？ というかちょっと幼い感じだけど、この子、前髪上げたらすいしょく可愛くね？

「…………わかったよ小鳥遊さん。話を聞くよ」

「山田くん…………ありがとう。でも、でも、気持ち落ち着けますから、ちょっとだけ待つてください」

すまん全国のBBS戦士たちよ。俺はちよつと遅れる。が、必ず参戦する。具体的にはオープニング後のCM中には行けると思う。だからほんのちょっとだけ戦線を支えていてくれ。今日も勢いTO Pテン入り目指して頑張ろい。

すう～～はあ～～と数回深呼吸してから、やがて落ち着いたのか小鳥遊がついに言つ。

「……私、山田くんのことが、好きです。……良かったら、私を、山田くんの彼女さんにしてください。お願ひします」

……正直、すげえときめいた。外見的にも相当可愛い（しかも普段隠しているところが高ポイント）な小鳥遊さんが、その白い肌をうつすらと赤く染めながら、潤んだ瞳に少しだけ涙を浮かべつつ上田づかいで告白してきたこの光景こそは、俺が何度も夢見て、そして諦めていたものだつた。でも。

「……「めん。小鳥遊さん。今の俺は、特定の彼女を作る気がないんだ。だから、ごめん」

「あつ……」

そう言つて謝りつつ、俺は後ろ手に教室のドアに手をかける。 そうなのだ。夢の『ハーレム機能』を手に入れた俺にとって、全人類のほぼ半数がそのターゲット。今の俺は選ぶ方の立場。小鳥遊さんが悪いという訳ではない。むしろ今現在においては彼女候補の筆頭と言つてもいい。でも、選択肢は多いに越したことはない。

まだ焼てる時間じゃない。諦めたらそこで試合終了なのだ。

100%理想の彼女を手に入れるその口まで、俺は、戦う。

「……じゃ、俺はこれで。ほんと、ごめんね」

がらつ。……ぬるん。びしゃ。

「ぬおおおおおおお……なんじゅこりああああ……」

背後的小鳥遊さんに謝罪の意味を込めた眼差しを送りつつ、でも確かに拒絕の意志を見せるために教室のドアを開け廊下に出ようとした俺を、何かぬらぬらしたモノが押し戻した。

「しょ、触手！？」
えええええっ！ なんでドア一杯に触手が蠢いてるんだよー？」

思わず尻もちをついた俺は慌てて左右を見回し、ベランダ伝いに隣の教室から脱出するところのプランを選択。猛ダッシュで西口差し込む窓へと向く。

「ぐつ！ ま、窓も、開かない、だと……。」

「あ、あの、無駄、だと思います。『堅忍固定』、しきりをつけてます、か……」「

恥ずかしそうな声でそんな厨一っぽい単語を言つのは、小鳥遊さん。

『時空固定』……異世界に行つた時に無口な魔法使い子から聞いたことがある。簡単に言つと時を止める魔法だとか何とか。……そのまま窓から外を見る。確かにさつきから差し込む西日は一切の角度を変えず、テニス部が打ちあげたボールは空中で止まつてゐる。この寒いのに下半身のみコニーフォーム姿の女子のアンダースローともめぐれ上がつたままだ。……あれはE組の武田さんか。いい脚している。やはり女性の価値は胸だけではなく脚にもあると言つていだろ。ぜひ一度対戦（してじつくり鑑賞）してみたいものである……じゃなく！

「な、ななな、なんだと…？ 魔法！？ 魔法だつて…？」
「は、はい。ちなみにその子は『触手結界』魔法の『うね子』さん、
です

やう言つて小鳥遊さんが描きした先は先程の触手ドア。うね子さんとやらが挨拶するやうにうねつねしてくる。その動きに合わせてすここ勢いで俺のUAZ値が削られていぐ。

あまりのことに呆然とする僕。それを不思議そうに見つめる小鳥遊さん。

「あ、あの？ 時間がないといつとndしたので気を効かせてみたのですが……。余計なお世話でしたか？」

あー。そうか。時間が止まつてゐるのならオープニングに間にあつね。よかったです。

「…………いやいやいや。落ちつけ俺。あの、小鳥遊さん？ 魔法だつて？」

「はい。魔法です。山田くん、あつちで見たことなかつたんですか？」

『時空固定』

なんだと…？

「あ、あつち……つて、小鳥遊さん。まわか……」

「はい。私も、山田くんと同じで、『あの世界』に呼ばれて、帰つてきました。ただ私は、神様じゃなく魔王さんのまつに呼ばれた側でしたけど……」

「そうか！ 神様に呼ばれた俺がいるんだ。
魔王側が同じことをし
ないという保証はない。」

「つ、つまり、小鳥遊さんは向こうの世界で俺に倒された魔王の仲間だったと……。え、も、もしかして魔王を倒された復讐で俺を殺そうと!?」

ちょっととまつてくれ！ 今の俺は戦闘能力皆無だぞ！？ そもそも風邪ウイルスのせいで俺、向こうでも一切戦闘なんかしてないし！ このクラスの魔法使いに襲われたら俺なんか秒殺だぞ！

「へっ？ 復讐？ そんなこと考えていませんよ？ そもそも魔王さん、生きてますし」

ちょっと待つて。魔王軍が魔王の首獲ってきたの見たぞ俺「

「あれば魔王さんが用意した人形、タミーです。……魔王さんは、確かに他の魔物さんたちと違つて死ぬことこそなかつたけど、でも衰弱したのは事実でしたから。……今は国王軍に見つかっていない隠れ家でじつと体力の回復を図つてゐるはずです」

「なんてこった……」

くそっ！ それならそうと言えよ魔王！ それ知つてればもう少し向こうに滞在して、姫や女戦士や女神官や女魔法使いや女獣つ娘との時間を堪能してきたのに！

「わ、私、ですね。魔王さんの側近として勇者のパーティーを迎えるとして、気がついたんです。勇者が、山田くんだつてことに……。春から、入学式からずつと気になつてた山田くんが、私が呼び出された世界にいる……これつて運命なんじやないかな、つて」

俺の動揺をよそに、夢見るよう語り始める小鳥遊さん。
…………そ

の、はにかむような表情と、背後のドアから見え隠れする触手の「ラボレーション」がえらくシコールだ。

「…………そして、一日で魔王軍を壊滅させた山田くんが、敵であるはずの私たちのために涙を流すのを見て、確信しました。『ああ。私は山田くんの、敵にすら同情して泣いてくれるこの優しさを好きになつたんだ』って……」

勘違いですそれ。ハーレム計画が駄目になつたと思つて泣いてただけです俺。っていうかどういつもいつも俺の涙を深読みし過ぎだ。もつと考える。頭使え。

あとね、その気持ち 자체も多分、自分自身のものじゃないから。それ俺の能力だから。

異世界にいた俺には、と言つか今でもだけど、『ハーレム機能』がついてるからさ、俺の事を見ただけで女の子は無条件で俺の事を好きになっちゃうんだよ。

「だから、思い切つて魔王さんに話したんです。全てを。そうしたら魔王さん、私の気持ちに同情してくれて、この世界に帰してくれたんです。……向こうで身に付けた、魔法の力を全てそのまま、で『なんてことしてくれやがる魔王！ ってか贋腫だろそれ！ 俺は『ハーレム機能』だけだつたぞ！

「…………そんな魔王さんの気持ちに応えるためにも、私、勇気出しました。…………ずっと隠しているつもりだった気持ちを打ち明けようど。勇気がなくて、三日もかかっちゃつたし、実は昨日、ちょっとズルして調剤した『惚れ薬』入りのクッキーも渡してみたのですけど、効果、なかつたみたいです。…………やっぱり勇者様の力はすご

いですね

控え目ながらも可愛いラッピングとは裏腹に、もの凄くどす黒い
気配を感じるクッキーがあったのはお前のだつたのかよ！ 何となく嫌な予感がして食わなくてよかつたよ！

「だから、今度はもう一度、ちゃんと自分の口で呑こます。……好き、です」

「いや。小鳥遊さん。気持せつれしこたび、わざわざ呑つたように」

ピキン！

そんな効果音を出しつつ、教室の床、壁、そして天井までが一瞬で凍りつく。

これは『絶対零度』の魔法！？

別名『エターナルフォースドブリザード』！？ 僕は死ぬ！？

「『』『めんなさい！ 私、まだ魔法に慣れてなくつて……。か、感情が高ぶつたりすると勝手に攻撃魔法とかが発動しちゃつて……！』

……『テット オア アライブ』ならぬ『テット オア ラブ』か……しゃれにもならねえよそんなの。……俺は必死に、生き残る術を考える。

「小鳥遊、さん」

「は、はい！」

「『』めん。今は彼女作る気になれないって言つのは本当なんだ。それに俺たち出会つたばかりでしょ？」

「あ、あの、一応クラスメイトになつてハケ月ほどたつてます、けど……」

間違えた。

「し、親しくはなつてないって意味ね！……だから、その、と、友達からとこづことではどうだらう？」

「お、お友達、からですか？」

「そう。友達。俺、友達少ないからさ、入づきあいとか苦手なんだ。だから、その、い、いきなり彼女とかだと困るけど、まずは、友達からつてことなら、いいかなあつて」

正確には『少ない』のではなく『いな』のだが、この際そういう細かいことはどうでもいい。……それ認めると悲しくて涙が出てやうしな。

俺の起死回生の一言。俯いてその言葉を瞼みしめるよつて聞いていた小鳥遊さんが、やがて、顔を上げて言つ。

「わかりました。私、がんばります。こつぱー、こつぱーこつぱーくじて、いつか山田くんに認められるがんばります。よ、よろしく、へいりよがいします！」

「わかりました。私、がんばります。こつぱー、こつぱーこつぱー笑顔は直視できないほど眩しくて、俺は危うく本気でこの子に惚れてしまつといふだった。……が。

「だ、だから。浮氣は、だめ、ですよ。山田へ……ううん。晴樹へ

ん！…………あ、あの、私の事は『小鳥』って呼んでください、ね……

……」

…………ついで俺の夢のハーレム計画が崩壊する」となった。

異世界ハーレム彼女の逆襲によって。

小鳥遊 小鳥（後書き）

ご意見、感想などを受けたらうれしいです。

一級フラグ建築士 VS 隼のフラグブレイカー

異世界。

そこは俺にとって夢のハーレムであった。

豪奢な椅子にふんぞり返った俺は、さて今日はどの娘とナーチして遊ぼうかと、周囲に侍るたおやかな女性たちを見回す。俺を見上げるその瞳はうつとりと濡れ、「さあ私を選んで！ そして食べて！」言っているようで、この中から一人を選ぶという作業がまた、楽しくも心苦しい。

迷いに迷いつつやがて一人を選んだ俺が、『そうか。別に一人じゃなくてもいいじゃん。よしこの際あと二、三人……』と他の娘たちも物色し始めたその時、轟音と共に雷が落ち、天から一人の小柄な人物が舞い降りる。その表情は長い前髪に隠れ、見ることが出来ない。

その人物が、小さな口から呪詛の言葉を紡ぎだす。

「晴樹くん……。浮気はダメって言いましたよね……」

ひとつ、ひとつ、ひとつと軽い足音を立てて近づいてくるその人物。彼女が軽く左右に手を振るだけで、俺の命よりも大事なハーレム要員たちが一人、また一人と声もなく消えていく。

「や、やめろ……近づくな……」

やがてその悪魔は俺の前に立ち、その綺麗な前髪をかき上げつづけた。

「浮氣者の晴樹へごとく、お・し・お・や・です。……少し、痛い
ですか、ひ、ね」

「小鳥遊いいいい！！！！！」

がばつ！

「土居、土居、土居、土居……。おやじ。お、おやじ……。」

俺はベッドの上で息を整え、冷や汗を拭う。

三日前、いや、もう四日前か。異世界から『ハーレム機能』を持ち帰り、生まれ変わった気持ちでこの世界を満喫していた俺の前に現れた悪魔、いや魔王の使い。

その名も小鳥遊小鳥。同じく異世界帰りのクラスメイト。

魔王にもらつたチート能力をフルに使って俺に迫りくる彼女の存在に、俺は心の底から怯えていたのだろう。まさか初めて会った俺の主觀的に、な(その日から夢にまで出てくるとは思わなかつたぜ……)。

『……私、山田くんのことが、好きです。……良かつたら、私を、山田くんの彼女さんにしてください。お願ひします』

……昨日のことが思い出せられる。

前髪上げたら実は可愛かったというのは『眼鏡を外したら美人』に通じるものがあり、それだけでご飯三杯はイケる。控え目な態度、鈴を転がすような声。正直言つて小鳥遊は俺の好みにぱっちりあつてはいる。だがしかし。

問題は、ふたつ。

その一。……いくら可愛いとはいえ、チート機能を使ってまで迫つてくるのは反則だと思うのだ。小鳥遊君。告白の為に時間を止める魔法使いなんて聞いたこともねえよ。

その二。……お前がチート機能を持っているようだし、俺も『ハーレム機能』を持っているんだ。俺の夢はハーレムを作り、さらにそこから厳選した最高の彼女を見つけること。その崇高な野望を邪魔すんじゃねえ。

「……って、本人を前にしたら言えないしなあ……」

凄まじい威力の『ハーレム機能』を持つこと以外は、今の俺はただの人。

魔王からその凶悪な魔法の全てを受け継いだ小鳥遊を振つて怒らせてしまつたら……そう考えるだけで身震いがする。

「何とか対策考えねえとなあ……」

頭の中で『脳内ハルキ君』——叩から五年までを呼び出し、対策会議を開きつつ登校しようとマンションのドアを開ける俺であった。

「お、おせよひいざいました！」

囁んでる。ましゅってなんだよましゅって。可憐いじやねーか。

ではなく。

俺は田の前に立つ小柄で伏し田がちな女の子に問い合わせる。

「た、小鳥遊！？ なんでここに！？」

「あ、あの……いつしょに登校したいなあ……って思つて……」

「あ、そ、そ、そ、うなんだ。ハハハ光榮だなあ。でもよく俺んち知つてたね？」

「そ、それは、その、こ、この子が調べてくれました……。探索系使い魔の『ミシル』ちやんです」

きじやあああ……

挨拶のつもりなのだろうか？ 小鳥遊の華奢な肩に止まっていた化け物、外見的にはそうだな。ひょこくらいのエイリアンに悪魔の羽を付けたような感じ？ が、まともに聞いたら石化してしまう。そうな鳴き声を上げる。

朝っぱらからヘヴィなモノ見せるな。SAN値が下がるわ。

そんな俺の動揺をよそに、その『ハシル』ちゃんとせりの頭を撫でる小鳥遊。

「ありがとうございます。ハルちゃん。あとでおいしいせんせんあげるからね」

モシヤああああああああ！！

多分喜んでいるのだろう。ぱつぱつとしたその蝶蛹のような翼を
はためかせるミシルちゃんといふ生き物。……こいつにあげる『お
いしい』はん』とやらが一体何なのかちょっと気になつたが、それ
聞くとSAV値だけではなく食欲までなくなりそうなので黙つてい
た。

とりあえず。

「そろそろ行こうか小鳥遊。や、そのミシルちゃん戻して。目立つから」

小声で何かを呟く小鳥遊。その声が終わると、ぽんつといつ音を立ててミシリちゃんが煙に包まれ消える。便利なもんだ。

「あら。せ、せこ」

立ててミシリちゃんが煙に包まれ消える。便利なもんだ。

「よし。じゃあ行くか。…………って、あれ？ あの娘は…………？」

そう言って歩き出そうとした俺の視界に、昨日の食パン娘が映る。

反射的に手を挙げて挨拶しようとした俺は妙なことに気がついた。
誰かを探すようにきょろきょろと周囲をうかがう食パン娘の目には、
俺が入っていないようなんだ。

やがてちょっとがつかりとした風に肩を落とし、歩き去る食パン娘。

「……なんだ？ おかしいな」

「フラグが立たないなんて。」

「え？ 何か言いましたか？ 晴樹くん？ ……あ、忘れてた」

何かを思い出したように軽く手を振る小鳥遊。その途端、ぱちんという軽い音がして、俺たけ……といつかこの一帯をを覆っていた透明な膜のようなものが弾ける。

「何だ今のは？ 小鳥遊？」

「えっと、『隠密結界』を解除しました」

「なんでまたそんな物騒な物を？ 誰かに狙われているのか？」

「ゴルゴ三十さんとかに。」

「や。そりゃなくつて……。は、晴樹くんのお家の前で待つてるとこか、見られたら恥ずかしいなあ……って思つて……。あ、でも嫌つて意味じやないですからね」

そういうつむきもじもじしている小鳥遊。その仕草は可愛いけどやつてることは意外に大胆というか凶悪。それで今日、新聞届いてなかつたのか。新聞屋すら追い払つたのかよ隠密結界。新聞代返せ小鳥遊。

「ん。……解除したのなら、まあいいや。行こうぜ。エレベーターはひつちだ」

そう言つて今度こそ歩き出した俺。

エレベーターの前で到着を待つのは、昨日のあの「風お姉さん。」にはひとつ、爽やかなあいさつで更に好感度を上げておくべきだと、俺の中のハーレム魂が告げている。朝から（正確には夢の中

から）続ぐ「タタタタ」で引きつり気味の顔を無理に笑顔へと変え、声をかけようとする俺。しかし。

「あ。晴樹くん。エレベーター待たなくとも平気ですよ。　えい
つ」

ヴィン。

「つおつりー　な、なんだ！」

一瞬で、五階にいた俺たちは一階のエントランスへと移動する。

「瞬間移動です。便利、ですよね？」

ほめてほめてと言わんばかりに小鳥遊が俺を見上げる。尻尾とかついてたらぶんぶん振り回しそうな勢い。相変わらず小動物系な彼女。名前は鳥類だけど。……ではなく。

「あ、あのな。小鳥遊。便利なのは認める。認めるけどな、こうほんぽん魔法を使つたら目立つちまうだろ？ 少しは控えようぜ」
「あ……。そ、そうですよね。」めんなさい……

途端にしゅんとしてしまう彼女。もともと小柄でうつむきがちなこの娘には、こういう表情もよく似合つ。思わずSに目覚めてしまいそうである。しないけどな。女の子は愛るものであつて苛めるものではない。断じて。……いやでも本人が望むのなら別ではないか？ 小鳥遊つて案外Mそつだしつ……。

先程逃げ出した『脳内ハルキ君』たちが再び集合し、『SMは有りか否か』という全人類にとつて有意義な会議を開き始めてしまつ

たため、不覚にも俺は、Hレベーターから出でたOー風お姉さん
に気付くのが遅れた。

あつ……。やう思つた時には件のOー風お姉さんは、軽くひびひ
田線を送り、小鳥遊とこつしょにいる俺を見てひみつとひびき
に微笑んだまま歩き去つていくところだった。

……まだ。またフラグを立て揃ねた。

絶対の自信を持つ『ハーレム機能』がうまく働かないことに不審
を覚え、立ちぬくし考え込む俺の袖をそつと引っ張る弱々しい力。

「何だ小鳥遊。今ちょっと考え事をだな」

「そ、それ……。その……」、小鳥つて呼んでほしにな……つて

「ああ

そう言えば昨日、そんなこと言つてたつけ。んー。でもなあ。

「すまん。小鳥遊。やつぱりその頬みはけよつと聞けないかも
「え……。やつぱり私つて迷惑ですか……」

先程とは比較にならないほど暗い顔。とこづか泣き出す寸前に
すら見えてる。

「違う違う。どつかつづーとお前が想像する理由とは逆のベクト
ルの理由だよ。……いいじやん。小鳥遊つて名前。俺はそっちの方
がいい

小鳥も確かに珍しい名前だけど、小鳥遊姓は俺にはつらやましい。
これは全国の『山田』だけではなく『山田中』君『鈴木』さんも同

じよつて思つんぢやないかな？ ありふれた姓をもつ俺たちは『小鳥遊』のような個性ある姓名に憧れるのだ。

「『山田』なんかよりよっぽどこい名前だよ。『小鳥遊』。俺は好きだな」

そう言つて歩き始める俺。いい加減急がないと遅刻しちまうわ。

「まあ、『小鳥遊小鳥』つて続くと正直どうかとも思つが……。あれ？ 小鳥遊？ おい。なにしてんだ、早く行こうぜ？」

返事がないことに違和感を覚えふと振り向くと、ヒントランスで固まつている小鳥遊がいた。その顔は限界まで赤く染まり、今にも倒れそう。

「や、『山田』姓より『小鳥遊』姓がいいつて……。そ、それってもしかして婿入りしたいつていう意思表示、ももももしかして、プロポーズでしうか……？」

「ちげえよ！ バー口ー！ 早く来い！」

「すげーポジティブだなこいつ！ 高校一年生の身分で求婚なんかするか！」

俺は夢見がちなこの少女の手を強引にとり、引摺りのうつにして歩き出した。

「……やつぱり遅すぎたか。美鈴、行つちまつたなあ

「いつも美鈴さんと登校してるのですか？」

「んー。何しろ保育園以来、十年に渡る習慣だしな。……誤解するなよ？ 腐れ縁つてやつだからな？」

「あ。はい。わかってます。……いい人ですよね。美鈴さん

「そうかあ？」

思いつきり疑問形で言つてみる。いい人は俺に一生モノのトラウマを植えつけたりしないと思つた？ しかも複数。

「はい……。私、人見知りだからクラスにも馴染めなかつたのですが、美鈴さんは数少ない友人です。いつも優しくしてくれます」

「そういうもんかねえ……。あつ！？」

それに気がついた俺は無意識に飛び出す。目の前にいるのは昨日の清楚な女の子。昨日と同じようにふらふらと車道に出やうになつてている。

昨日と違つるのは車道のほう。そんな彼女に向かい、一台のトラックが速度を上げて迫つてくる。運転手は携帯片手に通話中のように、歩道をよろめく彼女に気がついていない。

『危機的状況にある女の子を救つ……一級フラグ発動だ。

でも待て神様よ！ 確かに俺はハーレムが欲しい！ でもそのために女の子が危険な目に合つようじや本末転倒なんだよ！

「くそったれ！ 間にあえ！…」

俺は限界まで腕を伸ばし、その女の子を引き戻そうとする。しかし、その手はむなしく宙を掴むだけで、彼女の身に届かない。

もう一つ俺自身の体をクッショーンにして彼女を救おうと思い、車道に飛び出す覚悟で足に入れた俺の顔の横を、凄まじい突風が吹き抜けた。

「うう！」

そのあまりにも強い風力は、よろける女の子をその威力で歩道側に戻し、俺の目の前で展開される予定だつた悲劇は俺以外のだれにも悟られることがなく回避される。

その風は、俺の後方から吹いていた。

正確には、小鳥遊小鳥、その掌から。

「ま、間にあつて、よかつたあ……」

そう言ってへなへなと座り込む小鳥遊。

「……よくやつた。小鳥遊。風系統の魔法も使えるんだな」

「えつと、実は風系統が一番得意です。……あつちにいた時は、魔物の皆さんたちから、風みたいに早い小鳥つてことで『隼の魔法使い』って呼ばれてたんですよ。えへへ……」

異世界にもいるのかハヤブサ。いらん豆知識をありがとう。

べたんと地面に座り込みつつも、ほめられたのがよほどうれしかったのか、にこにこと微笑む小鳥遊。『ご褒美代わりに何となく頭を撫でてやる。

「わあ……」

わあってなんだわあって。頭撫でただけだろ。そんな蕩けそうなほど幸せな顔すんな。俺の方までざきざきしちゃうじやねえか。

「……って、しまった！ あの子は無事か！？」

慌てて振り向いた俺の目に映ったのは、風魔法の衝撃で転んでしまった女の子を介抱しているトラックから降りた運ちゃん。……やがて一人の間に何らかの話がまとまつたのか、女の子はトラックの助手席に乗り込み、運ちゃんはハンドルを握る。……恐らく念の為に病院にでも行くのである。

……なるほど。一度あることはサンダーマン。砂男だ。いや意味不明。

明。

俺はいまだに座り込んだまま呆けている小鳥遊を見下ろす。

つまり、こいつだ。こいつが全ての原因だ。

多分、本人にその気はない。なこと思つ。ただ、溢れんばかりの俺への想いが、俺の立てるフラグを結果的に片つ端からへし折つていくのだ。恐らく、無意識に。

「……上等じやねえか……」

めらり。そんな音を立てて俺の中の『ハーレム魂』に火が灯る。

そつちが凄腕のフラグブレイカー……そうだな。異界での二つ名をもじつて『隼のフラグブレイカー』とでも呼ばせてもらおうか……だとしても、俺だつて捨てたもんじやない。自称『一級フラグ建築士』である俺と、小鳥遊、お前のその力。

じゅらが上か、白黒つけをせてもらおうか……。

静かに闘志を燃やす俺と、そんな俺が無意識に頭を撫でまわしているせいで、魂が抜けかけてしまつている小鳥遊。……そんな俺たちは時が止まつたようにその場に立ちぬくし……。

その日、学校に遅刻した。

一級フランク建築士 VS 隼のフランクフレイカー（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

俺の隣の席がダフ屋に売買されています

「……すいません。山田です。遅刻しました」「す、すいません！ 小鳥遊小鳥です！ 遅刻です！」

……『ハーレム機能』不調の理由と小鳥遊の正体に気がついた俺が闘志を燃やしていた時間は結構長かったよう（あとついでに小鳥遊の魂が抜けていた時間も）、結局、俺たち二人はホームルームの時間に間に合わず遅刻してしまった。

不幸中の幸いだったことは、今日の一時限田がロングホームルームだったこと。ロングホームルームは各クラスの担任が教壇に立つので、つまり。

「あら。山田君。先生心配したわよお……あ。小鳥遊さんも遅刻だったのね。まあいいわ。一人とも席について」

……こりこりことだ。『ハーレム機能』がばつちりかかっている菊池先生（二十七歳。独身）は俺に甘いのでお咎めなしで済んだ。……それはいいけど、菊池先生？ 小鳥遊の扱いがあんまりな気がしますぜ？ ついでに、小鳥遊。遅刻したことに気付かれないって、お前普段どれだけ影が薄いんだよ。

「……ふう」

朝から激しくSAN値が下がる展開が続いたため、席に着くなり溜息が出る俺。そんな俺に小声で話しかけてくるお隣さん。美鈴。席まで近いとか、腐れ縁にも程がある。

「……どうしたのよ。あんたが遅刻って珍しいじゃない」

「ほっちは田立つことを嫌うため、基本的にルールを守る。少し前までの俺もそうだったし、最近はフラグ乱立防止のため更に早起きだつたから、確かに遅刻は珍しい。」

「いやまあ。いろいろあつてな……」

思わず遠い目をしてしまつ。イベント盛りだくさんの朝だつた。

うん。

「ふうん……。それって、小鳥ちゃんに関係あることなの?」

「……何でそう思つ?」

「せりやいつしょに遅刻してくればそう思つてしまふ。それに……」

そう言いつつ、美鈴がちらりと田線を上げる。つられてそちらを見ると、何やら拳動不審な小動物 小鳥遊と田が合つ。慌てて視線を逸らす小鳥遊。

「わっ起きからりずっと晴樹を気にしてゐるみたい。……何があつたのよ

?」

「何つて言われてもなあ……」

むしろ俺が聞きたい。俺、昨日『友達から』って言つたよなあ……

…?

「昨日も言つたけど、ああいう大人しい子ほど危ないんだからね。手作りチョコに何か混ぜられたり、家の前で待たれたり、あんたに近づく女の子を排除したりとかしかねないんだから。そういう前にちゃんとしておきなさいよ」

先生。つひの幼馴染がチートでピンポイントな千里眼の持ち主です。

あともうそれ全部体験済みです。かなり手遅れです。女つて怖い。お前も小鳥遊も。

「ちやんと……ねえ」

俺はもう一度小鳥遊を見る。

……俺の視線に気がついた小鳥遊が、小さく控え目に、指先を振つていた。

「さあ。今日のロングホームルームは月一回の恒例席替えタイムですよーー！」

「いえーい！ とノリのいい何人かの生徒たちが応えた。

何がそんなに楽しいんだお前ら。……いや、楽しいんだろうな。学校生活を満喫しているお前らにとつて席替えは重要なイベントの一つなんだろうよ。俺たちぼっちにとつてはせいぜい「後ろの方がいいな」とか「日当たりいいほうがいいな」くらいしか希望はないけどさ。

……と、先週までの俺ならそう思つたろう。

今は別の意味でどこでもいい。なぜなら俺には無敵の『ハーレム機能』がついている。隣がどんな女子であれ、一瞬でフラグを立てることが可能だからだ。

俺はのんびりと担任の用意した席替え用クジに並ぶクラスメイトたちの最後尾につく。……と思つたら違つた。後ろにちつこいのがいた。小鳥遊だ。

「…………晴樹くんの近くになれますよう」と晴樹くんの近くになれます
連たつていつめいに晴樹くんの近くになれますよつていつめいに

「…………おこ小鳥遊。田立つからねいつめいにさひめいに連呼すんな
怖いわ。

「ひやー！…………あ、でもきっと田立ちませんよ、多分…………」
「なんでだよ？…………まさかまた隠密結界でも使つてるのか？ 人
前で魔法使うのはやめとけとあれほど」
「違いますよつ。…………だって、ほひ

そう言つて小鳥遊が指さしたのは女子の一群。何やら大騒ぎして
いる。

「山田君の隣を！ お願い神様！」

「やまだー やまだー やまだー…………」

「山田晴樹！ 山田晴樹の近くを一枚よろしく！」

「やつまつだつ！ やつまつだつ！」

「山田君が教卓の真ん前になつますよつ…………」 こうと担任特権で

「…………

…………。

「あの山田祭り。山田特売日か？ あと約一名、生徒じゃない大
ちよつと君たち怖いんですけど？」

「何あの山田祭り。山田特売日か？」

「あと約一名、生徒じゃない大

人の女性の声が混じつて いるような 気もしましたが、 すよね 菊池先生？ 俺の勘違いで

異様な教室の状況に慄いているうちに、くじ引きは俺の番になる。その瞬間、教室は静寂に包まれ、俺の一拳一足にクラスメイト全て（プラス大人気ない大人一名）の視線が集まる。その有様は、まるで年末恒例の異種格闘技トーナメント抽選会場のよう。もちろん俺の立場は大本命選手。俺の引く一枚に、このクラスの女子の思惑が何重にも絡まる。

ゴクリ。

その雰囲気に呑まれた俺は箱の中から一枚のくじを取り出し、何となくやらなくてはいけないような、そんな義務感に駆られ、そのくじのナンバーを読み上げる。

「や、山田晴樹。十一番」

「十一番! ？」 ついでには隣は五番と十七番ねー。」

「外れたわ！」

五種ありませんか」「五種貰はますか?」

「やつは、要求多款」やつは、要求多款

やり直し要求多数により再実施はありね。いつそもう山田君の席は教卓前の指定席に、ううん、この際だから教卓を席にしてし

おれのも……」

うん。もう一度言ひ。お前ら怖い。

俺の隣の席を売るな買'な。ダフ屋は違法行為だ。ちなみに幾ら出す氣だ？

あと菊池先生はもう少し自重してください。大人なんだから。

一部女子生徒（プラスどうしようもない大人一名）によるクジの再実施が叫ばれたが、この展開に呆れている男子生徒たちが率先して民族大移動を始めると、やがて諦めたように女子も動き出す。…すまん。男子生徒の諸君。俺も君らの立場なら呆れる。というかむしろ怒る。それどころか呪いすらしたかもしね。比較的大人しい男子ばかりのクラスで良かつたと心からそう思う。

窓際最前列から一、一と続き、廊下側最後尾の三十六で終わるこの順番、つまり俺の席は窓際から一列目、後ろから一番目、なかなかいいポジションだ。

「俺の席はここか。……一ヶ月よろしくな。お隣さん」
「ええ。『また』一ヶ月よろしく。お隣さん」

右隣にいたのは見慣れたといつよりもはや見飽きた顔。美鈴。腐れ縁もここまで来るとすごい。もう鎖縁と表現を変えるべき。ま、気心が知れているってことではある意味よかつたのかもしないけどな。

「で、左隣は……つと」

反対側に振り向いた俺は、ふわりと爽やかな柑橘系の香りに包ま

れる。

「、これは、まさか……！」

「一ヶ月、よろしくね山田君。いい席取れてよかつたー」
そう言つて、いつと微笑んだこの天使。いや違う。長谷川佐代子さん。

「……神様……！」

俺は思わず胸の前で十字を切る。いや別にクリスチャンって訳ではない。

それぐらい、うれしかったのだ。長谷川さんの隣が。

クラスでも立つ方じやない。でもきっと密かなファンは多いくらいだ。

思つ。

綺麗に切り揃えられた前髪。でもそのさらさらの髪は実は腰に届くほど長く艶やかで。ちょっとたれ目がちな瞳と小さな口が上品さを醸し出し、それでいて常に笑顔で周囲に優しい雰囲気を振りまく。

何より。

『ハーレム機能』を手に入れる前の、凶悪な俺の目を避けることなくまっすぐ見つめ、他のクラスメイトたちに対する態度と一切変えることなく接してくれた彼女。それが当時の俺にとってどれほどうれしかったことか……。

「……山田君。山田くーん。おーい

「は？」

危ない。幸せの余り思わずトリップしてしまった。もう異世界には用はないのに。

「…………」
「…………」

「…………」
「…………」

「はーい。…………やー、実はこの席売つてくれって言われてたんだけ
どねー。田舎たりいにし、やめとこてよかつたよー」

そう言つて陽だまりの猫のように田を細める長谷川さん。『俺の
隣で良かつた』なんて、そこまで言つてくれる』とまでは期待しない。
…………それに、今の俺には『ハーレム機能』がついている。この
力があれば、すぐに長谷川さんとも仲良くなれる……。

つんつん。

「ん？ なんだ？」

控え目に背中をつつかれる感触に、俺は振り返つて 絶句した。

そこにいたのは、長い前髪では隠しきれないほど瞳を輝かせた小
鳥遊小鳥。

俺には小鳥遊がうれしさのあまり力一杯振り回している尻尾の幻
すら見える。何でお前そんなに子犬っぽいんだよ。お前鳥だろ。鳥
類だろ。隼なんだろ。

残念。小鳥遊さんは人間でした。だから日本語を話します。小さ
な声で。

「やつた。やりましたよ晴樹くん。お隣にはなれませんでしたけど
後ろです」

「俺の後ろに立つな

「無意識に撃つちまうから。

「授業中ずっと背中を見つめています」

「黒板見ろ

「俺の背中に穴が開くから。

「じゃあ語りかけます」

「ノートとれ

俺の背中に呪文喰くんじゃねえ。何か湧いて出てきたらどうする?

小鳥遊の発言一つ一つにダメ出しをする俺。でも小鳥遊の笑顔は崩れない。何だこいつ? やっぱりMなのか? 普通ここまで言われたら心折れないか?

「えへへ……。なんか、いいですね。こうこうの

「お前やつぱりM……。つと。じゃない。……一体、何がいいんだ

?」

「か、会話のキヤツチボール?」

「……」

……その時俺の脳内には、俺が力一杯、明後日の方に向へ投げつけるフリスビーを全力疾走でうれしそうに追いかける子犬の姿が浮かんだ。……うん。ぴつたりだ。

「ま、お前が楽しいのならそれでいいや。……くれぐれも言つておくけど、学校で魔法使うなよ。問題起こすなよ。俺に迷惑かけるなよ。わかったな

「はいっ!」

声は聞こえていないだろうが、そんなやり取りをする俺たちを興味深げに見つめる美鈴。……うーん。こいつ鋭いからなあ。千里眼

だし。気をつけないと……

ほんと、何もない」と祈る。……。

往々にして、神様というのは案外性格が悪いものである。彼らは、真剣な願いであればあるほど、叶えてはくれない。

俺の真摯な願いは、早くも次の授業で裏切られることになる。

カリカリカリ……。

鉛筆を走らせる音だけが、静かな教室に響く。

一時間目。数学の授業は小テストだつた。

背後に不安を抱える俺にとって、ティスマカッシンをしなどか言われる授業よりテストのほうが、むしろ今は都合がいい。

「あつ……」

小さな声が隣から聞こえる。そつとそつちを見ると、長谷川さんが消しゴムを落とした模様。それはいろいろ転がり俺の足元へ。

……やねじやねえか『ハーレム機能』。ひとつ控えめなフラグだが、つかみとしごはむしゃるのくじらのうじらとい。

俺は数学担当の森先生に気付かれないよつ、そつと屈んで消しゴムを取つひとつとする。

「あ……」

もう一度、先程と同じ声。違ったのは発せられた位置。それは驚くほどすぐそばから聞こえた。具体的には、互いの吐息が顔にかかるくらいの近さから。

消しゴムを握った手は、柔らかく華奢な長谷川さんの手を握っていた。……俺に気を使って自分でとらうとしたのであろう。目の前に、俺と同じく屈みこんだ長谷川さんの、綺麗な白い顔がある。

「……」

俺は無音で叫び声をあげる。我ながら器用だと思つ。その表情に驚く長谷川さんは、しかし、すぐにいつものように優しく微笑み、そつと人差し指を立てて自分の口に充てる。

「しーっ……ねっ？」

「さきゅーん。

撃ち抜かれた。いや、もう木つ端みじんに打ち碎かれた。おいでだらうそこの天使。なんでそんなに可愛いんだよちくしょ。ついでに神様。『ハーレム機能』をありがと。また何かあつたら呼んでください。いつでも馳せ参じます。

……しかし、幸せな時間は長くは続かない。

キンというその微かな音。それに気がついた人は他にもいたかもしれない。しかし、その音の正確な意味を知るのはこの世でただ一人。いや一人だけだ。

その音は『向こう』でよく聞いた音。……すなわち、魔法の起動音。

慌てて目線を上げる。ちょっとだけ悲しげな表情をした小鳥遊。その視線は握りあつた俺と長谷川さんの手に固定されており、自身の発動する魔法に気が付いていない。

『「！」、「めんなさい！ 私、まだ魔法に慣れてなくつて……。」
か、感情が高ぶつたりすると勝手に攻撃魔法とかが発動しちゃって
……！』

昨日の放課後、小鳥遊の言つていた言葉が脳裏によみがえる。

まずい。まずいまずいまずいまずい、まずい！

命の危険もさることながら、このまま魔法が発動したら小鳥遊の正体がばれる。

現代社会に登場した魔法使いがどんな運命をたどるか、どう考えても悲惨な未来しか見えない。国に捕まり実験動物扱いとか、さすがにかわいそうだろ！

……気がついた時には体が勝手に動いていた。

「小鳥遊！」「こ」がわからん！ 教えてくれーーー！」
「きやつー！」

振り向きながらもにそり叫びつつ、小鳥遊の肩を押さえる俺。いきなりの事に驚いた小鳥遊から、無意識に発動しかかっていた魔法の気配が消える。よかつた間にあつた！

「おい小鳥遊。お前今魔法を……」

「え、あ、ああ！？」

「……つたく。仕方のないやつだなお前は」

「……仕方のないやつなのは、お前だ。山田」

「くつ？」

振り返るとそこには、鬼の表情をした森先生。わお。

「先生、教師生活は結構長いが、これほど堂々としたカンニングを見たのはこれが初めてだ。……何か、反論はあるか？」

「……あー、えー、はい。すいませんでした。全面的に俺が悪いです」

「ではこのテスト、お前の答案は没収。後日、補習で再実施ということでいいな」

「はい。もう先生のおつしやるままで……」

おかしいなあ。俺、先生を含めたクラス全員の命の恩人のはずなんだけどなあ。

「とりあえず、廊下に立つてなさい」

「はい」

すゞじす」と廊下へと旅立つ俺に向か、何度も何度も涙目で頭を下げる小鳥遊。

……ま、いいよ。

さすがに鳥類魔物目イヌ科の小鳥遊とはいって、実験動物にされるのを黙つて見ていたら夢見が悪いし。だからこれはお前のためじゃない、今後の俺の安眠の為にしたことだ。そんなに気にするな。……でも。でもな。そんな些細なことより許せんことがある。

無人の廊下に出た俺は、一人、魂の叫びをあげる。

「……くつそお!! せつかくいい雰囲気だったのに!! ……おのれ『隼のフラグブレイカー』!! 次は絶対負けないからなああああ!!」

がらつ!!

「ひるさいぞ山田!! 廊下じゃなく外に出るか!! ああん!!」
「す、すいませんでした先生!! 静かにしてます!!」

……とほほ。

俺の隣の席がダフ屋に売買されています（後書き）

12/16、まさかのジャンル別日刊一位……。

信じられないといふか、「まさかドッキリ?」といふのが本音です。読んで頂いた皆さん、本当にありがとうございます。

多くのお気に入りだけではなく、ワールズエンド様から素敵なレビューまでつけて頂き、この作品は幸せ者ですね。

更新がんばります。

もしよろしければ感想が頂けたら、とも、とつてもうれしいです。これからもよろしくお願ひ致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3797z/>

異世界ハーレム彼女の逆襲！

2011年12月16日20時50分発行